世田谷村日記

石山修武

五月二十八日

昼、研究室。雑事を数件片付ける。富士山の現場より連絡あり、二川幸夫氏今日聖徳寺観音堂の撮影に入っているようだ。あいにく富士山が姿を見せておらず、再び撮るらしい。十四時カンボジアの渋井修氏来室。ひろしまハウスの件。石山修武画文集のちらし上る。李祖原が第一号の購買者となる。十六時過石山研ＯＢ野口修博士論文の件で来室。志を忘れずにいるようで良かった。十七時講談社園部氏来室。ＤＩＹ本の件。十八時松尾建設権藤氏、東京支店長来室。二〇時過研究室退。

五月二十九日

一時、何故か眠れず、起き出して世田谷村＝期工事のディテール、スケッチ。三ノ輪の物件のアイデア練る。新木場プロジェクトのコストダウンの方法少し計り思い浮かぶ。朝は八時過に河野鉄骨工業が世田谷村の現場に来るので、その前に地下天井のコルゲートをカットするラインを入れておかねばならない。だから早く眠っておかねばならないのだが、何故か頭が色々と考え始めて駄目だ。

開放系技術が眼に視える形で目指そうとするのは先ずルーズさ、それによって引き起こされる美学的まとまりの意図的放棄などによって引き起こされる非商品性への逸脱である。テクノロジーはすでに国家の枠を超えて資本主義化されている。つまり疑似共同体の幻想を超えている。その現実を更に超えようと欲するならば、テクノロジーを徹底的に個人化、固有化するしかない。個人の想像力（デザイン）の自由さえすでに幻想であろう。個人の主体性の砦としての想像力さえも資本主義化＝商品化されていると考えなくてはならない。それを認めた上での人間の自由を考えるならば、それは個人に内在したテクノロジーを仮想するしかない。レヴィ＝ストロースのブリコラージュの概念を民俗学的世界から資本主義的現実の只中に引き出して赤裸々に対置してみる必然がある。破壊しながら、同時に再構築してみせる方法を探る必要がある。モダニズムのデザインは必然的に完成され尽した商品性のニヒリズムへと突き進むしかない。そういう自動律の中に在る。

民俗学的退行の中のイコンにその方法を視るのではなく、（神はやはり死んでいるのだから）宇宙船という徹底した資本主義的商品の無目的な限界を見なくてはならない。宇宙船は資本主義のイコンだから。それだから、アポロ十三号の故障と、その資本主義的欠陥の克服による宇宙飛行士たちの帰還の物語りの現実の中に一つの別体系のイコンを視る可能性がある。あの帰還の物語り、宇宙飛行士達の情報世界の（地球と宇宙船との）中のブリコラージュ的営為、巨大な資本主義的装置（宇宙船）の故障の克服の歴史的切断面とでも呼ぶべき事件の物語りの中にイコンを視る正当性があるのだ。

六時四〇分起床。下の現場へ。コルゲートに深夜考えたカットラインを描く。随分考えた筈なのに現場で現物に触れ、又、未完状態の裸の物体の中に居ると、思い描いていたラインは修正され、残ったのは考えの原型だけだった。曲面に対応しようとすると頭脳がその三次元の複雑なからみについていけぬ。八時過までかかって５Ｍ程の一本のジグザグなカットラインをコルゲートシート